

徳富蘇峰記念館 第34回特別展示目録

『相模湾沿岸地域ゆかりの名士』展(西部編)

展示期間 平成29年1月6日(金)～12月17日(日)

いめい

相模湾沿岸地域にゆかりのある名士と、徳富蘇峰との交流を描く全3回シリーズの今年は第2編です。

昨年開催の第1編「大磯を愛した日本の名士」では、日本最初の海水浴場が開かれた地・大磯に居を構えた8人の宰相や、三井・三菱・安田といった日本を代表する財閥の総帥など、各界要人が競うように大磯に参集した様子を考察しました。

今回の「相模湾沿岸地域ゆかりの名士(西部編)」展では、大磯より西の地域、二宮から小田原、真鶴、湯河原、熱海、伊東、下田までの各地にゆかりのある諸士を取り上げます。

江戸時代より城下町として栄えた相模湾沿岸の中心都市小田原。その小田原が明治22(1889)年、開通した東海道本線のルート(国府津から山北・御殿場経由で沼津)から外れるという、一大窮地に陥ります。この状況に際し、“箱根・熱海・伊豆の玄関口”という地の利(要衝)を自らの手で守ろうと、地域鉄道の敷設(小田原馬車鉄道「国府津-小田原-湯本」や豆相人車鉄道「小田原-熱海」)に乗り出し、難局を打開しました。東京からの足が確保されたことで、政財界の重鎮や多くの上流貴顕が別邸を構え、やがて御用邸も開設されました。明治時代の半ばには独

自の“邸園文化”や“近代茶人文化”が広まり、小田原はその繁栄を回復しました。東京近在の観光資源を西方に求める動きは加速し、昭和初期には伊豆半島全域にまで達しました。(昭和8(1933)年・伊豆循環道路東海岸線の完成)

関東大震災など幾多の困難を排し、首都圏方面から漸次延伸される交通網との連帯が進むに従い、アクセス難だった景勝地域の保養地需要が喚起されました。新たな保養地の魅力に惹かれた著名人士が集い、政治的思惑などが梃子となり、独特の個性を纏った町が随所に出現、結果として地域の経済的・文化的発展がもたらされました。リゾート草創期に各地で見られた「近代化による、人と地域の相互貢献」。こうした形態が、西相模から東豆方面にかけても広く顕在化しました。

徳富蘇峰は相模湾西部周辺について「最も天然に恵まれた地。地下には温泉があり、沿海には魚介海草があり、気候温和、風光絶佳」とコラムに記し称えています。またこうした地での「自動車遊行が飯より好きだ」とも開陳しています。

終の棲家を熱海に定め、また自らを「伊豆山人」と号した徳富蘇峰。同じく相模湾の風光を愛でた各方面の貴紳名士達と、蘇峰は何を語りどう親交を深めたのか。直筆の書簡や書を元に、その庄巻の交遊録に迫ります。政官財軍、文人墨客に彩られた人気保養地の歴史やエピソード、また先に触れた相模湾西部における地域交通網の変遷など、併せてお楽しみいただければ幸いです。

最後となりましたが、今回の展示にご協力を賜りました関係各位、諸機関に対し、厚く御礼申し上げます。

小田原

小田原市は、神奈川県西部に位置し、戦国時代には北条五代の、そして江戸時代には小田原藩の城下町として隆盛を誇りました。東国の要衝として栄えた小田原宿は、東海道五十三次中最大規模の宿場町を形成しました。徳富蘇峰は昭和2年、訪れた小田原城址本丸築地からの展望を次のように記しています。「一方には函嶺を帯び、他方には相海を控え、而して酒匂と早川とは帯の如く其の東西を環り、要害といえれば此れに若くものはあるまい。謙信も信玄も各一たび城下にせまりたるが、遂に其の志を達するを得なかったのも偶然ではあるまい」と。自然を巧みに利用した小田原城の堅牢さを俯瞰し、悠久の歴史に思いを巡らせました。

明治の中期頃、東京からも近く温暖な保養地として、小田原には多くの要人が住まい訪れました。明治23(1890)年、御幸の浜に伊藤博文別荘「滄浪閣」が竣工、明治34(1901)年には小田原城二の丸に御用邸が造営されました。さらには経済界の重鎮・益田孝(鈍翁)が「掃雲台」(明治39年)を、政界の大御所・山県有朋(含雪)が「古稀庵」(明治40年)をそれぞれ構え「別荘文化」とも表現される賑わいを見せました。若き新聞経営者の徳富蘇峰も、小田原に隠棲したこうした大物貴顕らと親交を結び、その様子が書簡に残されています。

交通の要衝地でもあった小田原は、幾多の困難を排し、小田原馬車鉄道や豆相人車鉄道、箱根登山電車や箱根自動車道など各種交通網の整備開拓に専心してきました。かつての大藩都・小田原が交通発展の黎明期に見せた行動力によって、小田原以西、例えば伊豆半島の保養地化が進み、観光地開発も広がりました。

相模湾沿岸の西部地域において、小田原が果たした役割は大変大きなものでした。別荘文化や交通網整備に象徴される「小田原文化」の伝播が漸次西進し、各地域に参集した著名人士によって、特色ある別荘保養地が次々と生み出される結果となりました。

やまがた　ありとも

山県有朋

天保9年〜大正11年(1838〜1922) 山口県

長州藩士、陸軍軍人、政治家。初代内務大臣、内閣総理大臣(第3・9代)、元老、貴族院議員、陸軍参謀総長(第9代)などを歴任。

★山県は明治20年大磯に「小洵庵」を建て、後に小田原板橋の別荘を建築。「古稀庵」と命名し、亡くなるまでこの地で暮らした。「小田原の大御所」と呼ばれ、小田原詣でをする重鎮が絶えなかったという。相模湾と箱根山を借景とし築造された「古稀庵」は、山県所有の「目白椿山荘」、「京都無隣庵」とともに、近代日本庭園の傑作とされている。

◆展示書軸 (蘇峰の賛と山県の歌)

山県元帥自称一介武弁蓋謙辞也 公思慮縝密胸中無限機略存 而其堅忍不撓之精神與百敗不屈之胆氣深藏潛蓄天下知之者鮮矣 是国歌一首明治十年西征役田原坂陣中所詠曾所賜予 予今老矣仍贈靜峯賢契併記其奉由 蘇叟九十一

肥後国にて戦ひけるとき 有朋

木留山しらむ砦のすてかがり 煙ると見しは桜なりけり

◆展示書簡 (明治43年6月5日) 山県有朋より蘇峰に贈られた歌

古稀庵に行啓あらせられたるとき、かしこみて読奉りける

大君のめくみあまねき草の庵に

また光りそふけふにもあるかな

此日庭園にものしたまひて瀧みそなはしつゝ流れにそひ若葉のかけを伝ひて一草庵の茶室にならせ給ひけれハ

夏木立みとり色こき草の庵に

木のめたてゝそまつ奉つる

あるしの仕舞を見んと仰せられければ、ひとさし舞ひて

若竹の笛のひとふし老の身の

手ふりをいかにみそなはしけむ

剣太刀好くまねことのまひ扇もて

むかしわすれぬまひのひとさしこれ

源 有朋上

封筒表に「明治四十三年六月五日大正天皇が東宮たりしとき古稀庵に行啓せられた時」と蘇峰の書き込みあり

◆展示品 昭和8年「公爵山県有朋伝」完成の御礼として、遺族から贈られた「山県雪公遺硯」

◆展示本 徳富蘇峰編述「公爵山県有朋伝」上・中・下巻

きよふ せうご

清浦 奎吾

嘉永3年～昭和17年（1850～1942） 熊本県

政治家。明治17年、内務省警保局長に就任し、保安条例制定などに尽力。有力な山県系官僚として政界に影響力を及ぼす。勅撰貴族院議員、司法大臣、農商務大臣を歴任。大正13年1月に首相となるが、その後の総選挙で大敗し、同年6月に総辞職した。

★山県有朋の勧めで、小田原にある山県別邸「古稀庵」の後方に土地を求め、別荘「皆春荘」を構えた。その後大森山王に新邸を建築したため「皆春荘」を山県に譲る。晩年熱海に別邸「米寿庵」を建て、昭和17年にこの地で亡くなった。蘇峰は翌年、この清浦別荘を購入して「晩晴草堂」と名付け移り住んだ。

◆展示書簡（昭和8年2月6日付）

山県有朋公伝三冊接受 簡様なる鴻著か意外に早く脱稿したるは 三長を具へたる人の業に成るものとは申しながら 敬服く 上巻だけは快読乎不釈乎既に卒読 維新前後に於ける志士の面目 殊に公の眞骨頂眞本領躍如流露 読者をして感奮興起せしむるものあり 本書は山県有朋伝とは題するも 其徳川末期より明治大正時代に渉る歴史と称すべし

中巻下巻と追次蔗境に進むを楽しみ候 書外近日期拝話 老生熱海療養にて健康復旧 時下寒威料峭 御自愛を祈る 不悉

二月六日

奎翁

蘇峰学兄硯北

封筒表、東京市大森区新井宿山王 徳富猪一郎殿

封筒裏、伊豆熱海町 清浦奎吾。

◆展示書軸（蘇峰の還暦の祝に清浦から贈られた賀詞）

崇山北聳大江東 磅礴清氣騰遠空 聞道山川秀靈地 古來往往生英雄 果哉今見寧馨兒 有似蘇峯卓然峙 一代文章光燄長 舌眼燃犀近世史 来更復名聲揚 才識今古推壇場 華甲之寿寿何為 千歲不朽成簞堂 賀蘇峯学兄華甲 奎堂

ますだ たかし

益田 孝

嘉永元年～昭和13年（1848～1938） 新潟県

実業家。明治維新後世界初の総合商社・三井物産の設立に関わり、日本経済新聞の前身である中外物価新報を創刊。茶人としても高名で鈍翁と号し、「千利休以来の大茶人」と称された。

★益田は明治39年小田原板橋に2万5千坪の土地を購入、「掃雲台」と命名し住み始めた。益田と親しい山県有朋、清浦奎吾、大倉喜八郎など各界の名士たちも次々小田原に別荘を構え、益田を中心に茶人文化が広がった。その中でも松永安左工門（耳庵）、野崎広太（幻庵）は益田と共に近代小田原三茶人として知られている

◆展示書軸

徳富蘇峰翁の崑之年齡を祝して 雲外 孝八十四叟
阿蘇の峯に遠くひびかむ 翁を祝ふ 葦の林の崑びの聲

◆展示書簡 (大正10年1月16日付)

北條氏の御記事日々拝読 御調之詳細なる二深く感服仕候 此論法徳を煩ハシ見置度候 小田原へ移住して田野二農民と対話いたし小生一ノ新老梅を得たる一事有之候 夫ハ江戸之言葉二有之候 御承知ノ通り江戸を一里離れ実鼻ハ懸り候ハバ最みくるしき言語二相成候処 実中央人二至りてハいつれより徳川氏が持ち来りしか 誠二分り好き言語に有之候を学者ハ三河より持ち来りしたらんとの説二有之候 然る二小生対留ノ節小田原の田野人と対話いたしみる二皆全く江戸言葉二有之候 水呑百姓ノ老人共までが実加那の美事なる全く都人に御座候 小田原の文明を徳川氏が江戸へ入れ深川遊女屋之式まで小田原其のままを用ひてハ明なり 夫故言音も小田原へ入りしたらんと被存候 御記事之如く 北條氏ノ民政二心を注ぎ最自由不干渉主義を以て営業せしめ候故 誌面ノ商工業者争つて茲に来り(支那人の如きも即ち会し外郎家ノ如き移住ノ茶店を続き候) 営業致候故小田原ハ コスモポリタン主義ニテ 遂ニ各地の言語も集り其内ノ解し易き美しき音が小田原に來たものと被思候 此説未だ反対を受け不申候ハ共 尚高論を垂れられんことを惣帝(すべて)氏康の民政ニ長したるニハ感服致居候□□記事を拝読して愚存を証明せられ感激ノ余り余計なる事を申上候 多罪御寛恕を乞ふ 頓首

十、一、一六 孝

徳富大人坐下

封筒表 市内青山南六ノ三十 徳富猪一郎様 親展 至急

封筒裏 小田原板橋 益田孝

伊藤博文

天保12年〜明治42年(1841〜1909) 山口県

政治家。初代・第5代・第7代・第10代の内閣総理大臣および初代枢密院議長、初代貴族院議長、初代韓国統監を歴任した。元老。

★明治22年に父十蔵の隠居地として小田原(現栄町)に居宅を建設。明治23年には現在の小田原市本町に別邸を竣工し「滄浪閣」と命名した。

同年伊藤は貴族院議長に就任、明治25年には第二次伊藤内閣が組閣され、その間日清戦争も起こり、政府の要人が東京・小田原間を往来した。

伊藤は法典調査会を設置し総裁として民報改正に着手、穂積陳重、富井雅章、梅謙次郎の3名の法学博士と共に、明治27年立案執筆を行った。そのため滄浪閣は「民法発祥の地」とされている。

◆展示書簡 (明治35年6月23日付)

拝啓 益御清適奉賀候 陳は明日午後五時赤坂三河屋に而小集相催候間御閑暇に御坐候はゞ御来車被成下度奉待候 草々敬具

六月廿三日 博文

徳富猪一郎殿

封筒表 赤坂区青山南町六丁目三十番地 徳富猪一郎殿

封筒裏 明治卅五年六月廿三日 侯爵伊藤博文

室田義文

弘化4元年〜昭和13年(1847〜1938) 茨城県

外交官、政治家、実業家。特命全権公使、貴族院議員。百十銀行頭取、北海道炭砒汽船社長などを務める。伊藤博文の側近として、博文がハルビン駅頭で狙撃された際に同行、自身も被弾した。

★大正10年から小田原に住んだ。野崎幻庵が小田原市城山に「安閑草舎(山房)」という茶室を造ると、その隣に「三樹荘」を営み、頑翁の名で茶の湯を楽しんだ。小田原に近代の茶人文化を興隆させた人物の一人。

◆展示書簡 (昭和10年7月20日付)

謹啓時下益々御清安奉敬賀候 陳者桜田烈士中水戸二生還セシ増子金八氏ハ従年贈位者中二漏シタル者ニ付有志ニ候 此際贈位の申請ヲ成ス事

ト相成同人ノ事跡ハ貴著日本国民誌四十三卷三百三十七ページに掲載御座候二付右ノ事跡ヲ一筆御証明相願内務省ノ申請ニ添付致度ト 在水戸福地徳氏及某村長ヨリ依頼難默止 折角御静養中乍恐縮何卒御一筆ヒ成下度懇願仕候 要件のみ 草々拝具 七月十九日 室田義文

徳富蘇峰先生 玉案下

封筒表 山梨県富士山麓山中湖朝日ヶ丘双宜荘 徳富猪一郎様

封筒裏 相州小田原町天神山 室田義文

大隈 重信 おおくら しげのぶ
天保9年〜大正11年(1838〜1922) 佐賀県

政治家。明治14年の政変で下野し、翌年立憲改進黨を組織。伊藤・黒田内閣の外相として条約改正にあたったが、玄洋社の来島恒喜に爆弾を投げられて片脚を失う。板垣退助と共に憲政党を結成し、明治31年最初の政党内閣を組織。大正3年再び首相となり、第一次大戦への参戦を決定。大正4年には対華二十一カ条要求を提出した。東京専門学校早稲田大学の前身の創立者。

★明治30年に大磯に別荘を構えたが、隣地に本邸を構える伊藤博文との政治的軋轢などもあってか、わずか10年で大磯を引き払っている。明治40年に温暖な国府津の前川村に3000坪の土地を取得して、木造平屋建の別荘を建てた。地元の農家や漁師とも親しく交わったそうである。

◆展示書簡 (明治30年10月13日付)

来ル十八日ハ小生遭難第八周年ニ相当致シ 聊力追懷ノ為メ園遊会相催候間同日午後三時早稲田私邸へ御来臨奉希望候 敬具

三十年十月十三日

徳富猪一郎殿

御来否御一報フコフ

大隈重信

封筒無

田中 光顕 たなか みつあき
天保14年〜昭和14年(1843〜1939) 高知県

政治家。勤王運動を経て明治政府に出仕。岩倉使節団に加わり欧米諸国を視察。明治31年第3次伊藤内閣で宮相に就任。その後明治42年まで宮相を務め、宮中政治家としての勢力を確立した。また明治維新の志士の遺墨等の蒐集につとめ、青山文庫、多摩聖蹟記念館等を設立。通称は顕助、号は青山。

★田中が小田原に建てた別邸の本館は昭和12年に建築されたスパイ風。別館は純和風建築で大正13年に建てられた。ともに登録有形文化財に指定されている。本館は平成6年より小田原文学館として使用されている。蘇峰は田中を尊敬し、蒲原の「宝珠荘」へも度々訪ねていることから、小田原別邸にも足を運んでいたと思われる。

◆展示書簡 (大正15年12月11日付)

霜氣凜然之節 先生益御健康敬賀之至に奉存候 陳ば一事御内話申上度儀有之候に付 先生に代り秘密談の出来候人御差遣しは不相叶候哉 貴社新聞紙の為に御内話申上度存申候 為其呈此一書候 勿々頓首拝具 大正十五年十二月十一日 田中光顕

蘇峰先生侍曹

尚々静岡の御支社出張よりは、貴本社 of 可然堅固なる人を希望仕候也 御枉車の日時前以御通知被下度候也

封筒表 東京市外大森山王台 徳富蘇峰先生。

封筒裏 静岡県蒲原町 田中光顕

大倉 喜八郎 おおくら きはちろう
天保8年〜昭和3年(1837〜1928) 新潟県

実業家。戊辰戦争に際し官軍御用をつとめて巨利を得る。帝国ホテル等も含め内外に多くの事業を展開し、大倉財閥を築いた。東京経済大学の

前身である大倉商業学校の創設者でもある。号は鶴彦。

★小田原の板橋に大正9年に別荘「共寿亭」を建築。その頑強な造りは関東大震災においても被害はほとんどみられなかった。現在、登録有形文化財に指定されている。

◆展示書簡 (明治38年9月7日付)

拝啓此度一兩日之騷擾ハ言語同断ノ次第と奉存候 殊ニ貴社御迷惑ノ段 奉拝察候 幸ニ格別ノ大事ニ不至引続発刊相成候間先以安慮上申候 不取 敢右御見舞迄如此御座候 早々敬具
九月七日朝
鶴彦

徳富先生 梧石

封筒表 京橋区国民新聞社にて 徳富先生 見舞

封筒裏 大倉鶴彦

くろだ ながしげ

黒田 長成

慶応3年〜昭和14年(1867〜1939) 福岡県

政治家。号は桜谷。父は筑前福岡藩の最後の藩主黒田長知。黒田長政から数えて福岡黒田家13代目の当主である。

★黒田長成の別荘「清閑亭」は明治39年に建設され、現在では登録有形文化財に指定された数寄屋造りの建物である。小田原城三の丸土塁の一角に建つため、小田原の町や相模灘を見渡すことができる。黒田は大正13年枢密顧問官に就任してから「清閑亭」で過ごす時間が多くなり、周辺地に材をとった漢詩を数多く残している。

◆展示書簡 (明治32年10月10日付)

拝啓陳者来ル十三日 日本橋亀嶋町偕楽園ニ於テ東邦協会支那調査会準備委員御一同ヲ招待シ綏々御懇話拝承仕度候間 同日午後四時御貴臨被下度此段御案内申進候
敬具

追テ御諾否ハ来ル十一日正午迄ニ御一報ヲ煩ハシ度候

明治三十二年十月十日 赤坂霊南坂町二十七番地 侯爵黒田長成

封筒無し 印刷 筆で「応諾」と書き込みあり

やました かめさぶろう

山下 亀三郎

慶応3年〜昭和19年(1867〜1944) 愛媛県

実業家。山下汽船(現・商船三井)・山下財閥の創業者。勝田銀次郎、内田信也と並ぶ三大船成金の一人。

★山下の別邸「対潮閣」は、やまと新聞社長・松下軍治の豪壮な邸宅を大正5年に購入したもの。庭は山県有朋が指示し造園したもので、「対潮閣」も山県の命名。

◆展示書簡 (大正14年2月27日付)

拝啓益々御清祥奉慶賀候 一昨年震災ニ際シ熱海海岸ノ小荘ニ於テ浪ニさらわれたり候信じ居りし妻子ハ無事にして全域鉄壁の如し古今二居りシ小田原対潮閣ハメチャメチャの倒壊致候事ハ天意ノ有之事を知るニ足るハ其故 伊藤山県公等に関するものを除き全閣備付けの蔵品全部を入札ニ付志成金気分を一洗致居候 来ル一日東京美術倶楽部の部ニ御一覽御批評ヒ下度候ハバ光栄ノ至リニ奉存候 両三年来兎角二天候険悪ノ航海も骨が折れ候ハ共日本不定期船主有之ナラン 横綱ハ張り通志可申 此点も御覧置きを奉願候 早々不一
二月二十七日 徳富先生 山下亀三郎

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社徳富先生

封筒裏 東京市芝高輪山下亀三郎

あきやま さねゆき

秋山 真之

慶応4年〜大正7年(1868〜1918) 愛媛県

海軍軍人(中将)。明治30年米国留学、33年まで米西戦争を観戦、米国海

軍での実地研修で軍事理論の研鑽を積む。帰国後、海軍大学校教官となり、戦略・戦術・戦務などを講義。その後長らく日本海軍兵学の基本理論となる。日露戦争では連合艦隊作戦参謀として活躍。兄は「日本騎兵の父」といわれた陸軍大将の秋山好古である。

★山下亀三郎と愛媛の同郷であったことから小田原の山下の別邸「対潮閣」にたびたび訪れていた。山県有朋の別邸「古稀庵」を訪ねては国防論の相談をしていたといわれる。大正7年、患っていた盲腸炎の悪化により、ここ「対潮閣」で息を引き取った。蘇峰は秋山を「天才的、赤心愛国の好男児」と評している。

◆展示書簡（大正4年4月6日付）

拝啓 益々御清祥奉欣賀候 然者貴著世界之変局ハ新聞紙上ニ日々拝読御高見ニ敬服致居候折柄茲ニ一冊として御患贈を辱し殊更感謝ノ至ニ御坐候 右不取敢御礼申上度寸楮如此に候 勿々頓首

四月六日

秋山真之

徳富老兄 御坐下

封筒表 京橋区日吉町民友社にて 徳富猪一郎様

封筒裏 海軍省 秋山真之

望月軍四郎

明治12年～昭和15年（1879～1940） 静岡県

実業家。望月商店を開業。田口銀行頭取、日清生命社長、京浜電気鉄道（現京浜急行）の取締役会長。昭和8年には品川乗り入れを実現し、品川・浦賀間を直通とする京浜急行の基礎を築いた。教育関係にも熱心で、多額の寄付を継続したほか、日満文化学会、静岡に大宮工業学校、大宮商業学校を創立した。

★「静山荘」は、明治25年に建築された古民家を、望月軍四郎が昭和14年に上府中村から現在地に移築した建物。豪農家を別荘にした珍し

い建物である。書院造りの座敷と民家風の広間が良く調和している。

◆展示書簡（大正10年7月10日付）

拝啓仕候 時下梅雨ノ候兎角憂鬱敷存じ候所 益御清祥にて奉大賀候 扨此度ハ御著述ノ戦史御寄贈ニ預奉万謝候 大部ノものとて一々精読は覚束なく候へ共何れ寸暇を見て拝読仕候 御厚志ノ副へ申べき心底ニ御座候 其内参館御礼万謝可仕候へ共不取敢如此ニ御座候 草々頓首 七月一日 望月軍四郎

徳富猪一郎様

封筒表 赤坂区青山南町六丁目 徳富猪一郎様

封筒裏 青山南町六の六一 望月軍四郎

雨宮敬次郎

弘化3年～明治44年（1846～1911） 山梨県

実業家・投資家。「甲州財閥」の一人。明治21年甲武鉄道の取締役となる。川越鉄道、北海道炭砒鉄道と関わり、日本鑄鉄会社を起した。東京市街鉄道株式会社を設立。京浜電鉄、江ノ島電鉄、大日本軌道の社長に就任するなど、近代産業の多くの分野の事業に参画した。早くより鉄道国有論を唱える。

★熱海・小田原間を結ぶ豆相人車鉄道は、明治時代の鉄道資本家で「軽便鉄道王」と言われた雨宮敬次郎の発案で敷設された。その業績を称えた石碑が熱海梅園内に建てられている。

◆展示書簡（明治〇年12月5日付）

謹啓 時下向寒ノ候 益御清適奉恭賀候 陳者御高評相仰度事件有之従て愚見も申述度 尊徳を煩し度候間来ル八日午後四時帝國ホテルへ御光臨被成下度奉願候 先者右御案内まで万々 如此ニ御座候 頓首 十二月五日 雨宮敬次郎

徳富猪一郎様 仕史

二伸 御多忙中恐入候へ共当日八御繰合奉願候 尚御臨席之有無御一報奉煩上候也

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社 徳富猪一郎様

封筒裏 京橋区築地三丁目十五番地 雨宮敬次郎

松本 宇一 まつもと ういち

昭和16年（～1941）

昭和16年7月22日の暴風雨の折、支障場所を見回り中に鉄橋より誤って足を滑らせ落下し殉職した。

★小田原市米町には「松本駅長殉難の碑」が立っている。碑文は親交のあった菊池寛によるものである。

◆展示書簡（葉書）（昭和14年10月〇日付）

謹啓仕候 其の後の御無音を謝し奉候 先生にはその後の御容体は如何に候也 国家多端の折柄 只管御快癒を祈里居申候 別便を以て当地名産ゆづ菓子と梅菓子些少乍ら御届け申上候間御笑納ヒ下候はゞ幸甚の至りに奉存候 末筆乍ら御自愛專一に奉祈上候 敬具

山梨県南都留郡中野村山中湖畔旭日丘 徳富蘇峰先生

小田原駅長 松本宇一

北原 白秋 きたはら しろあき

明治18年～昭和17年（1885～1942） 熊本県

詩人・歌人・童謡作家。本名・隆吉。明治37年早稲田大学に入学したが間もなく退学、新詩社に入り「明星」に詩・短歌を発表。吉井勇らと「スバル」を創刊した。明治42年処女詩集「邪宗門」、2年後詩集「思ひ出」を発表。大正7年鈴木三重吉創刊の雑誌「赤い鳥」で童謡を担当。大正11年山田耕作と共に『詩と音楽』を創刊。山田とのコンビで数々の童謡

の傑作を世に送り出す。

★北原が小田原に住んだのは大正7年から15年までの8年間である。大正8年5月に伝肇寺（でんじょうじ）本堂の東側に小さな家を建設。

とぼけた木兎（みづく）の顔に似ていることから「木兎の家」と呼ばれた。小田原で白秋は「雨」、「赤い鳥小鳥」、「あわて床屋」、「ちんちん千鳥」、「揺籃のうた」、「砂山」、「からたちの花」、「かやの木山の」、「ペチ力」、「待ちぼうけ」、「この道」など多くの童謡を書いた。

◆展示書簡（昭和7年2月28日付）

「徳富蘇峰先生古希祝賀会」出席の返信はがき

片岡 永左衛門 かたおか えいざもん

万延元年～昭和19年（1860～1944）

郷土史家 足柄下郡小田原町長代理 小田原町助役。

★「明治小田原町誌」を執筆し、小田原の近代史研究に大きな功績を残した人物。県立小田原城内高等学校の創立に尽力した。片岡永左衛門は小田原4本陣の1つ「片岡本陣」の当主でもあった。

◆展示書簡（昭和8年8月12日付）（ハリス参府の資料同封）

拝啓其後は御無音仕候處 弥々御健勝奉賀候 国民史日々難有拝見仕居候 就ハハリス参府之記録手元に御座候分御覧に入申候 吉通ハ奉行よりノ速達 吉通は拙宅之帳簿の写に御座候 乍末筆奥様へよろしく御伝声奉願候也

八月十二日 片岡永左衛門

徳富先生貴下

封筒表 東京市外大森町山王 徳富猪一郎様 貴下 親展「入用」「ハ

リス参府記事在中」と書き込みあり

封筒裏 小田原町 片岡永左衛門

川田 順 かわだ じゅん

明治15年～昭和41年（1882～1966） 東京

大正・昭和期の歌人・宮中顧問官・文学博士。小泉八雲の薫陶を受ける。住友本社常務理事。佐佐木信綱に師事した。戦後は皇太子の作歌指導や歌会始選者としても活躍。京都大学経済教授・中川与之助の夫人で歌人の鈴鹿俊子との恋に苦しみ、自殺未遂を起こした「老いらくの恋」で有名。

★京都を離れて俊子夫人と国府津に隠棲した。

◆展示書簡 （昭和27年6月23日付）

謹啓 全歌集鳥詩がましくも敢て拝呈仕候処 御懇書頂き候テ恐縮に不堪候 来月上旬には二宮春秋園にて拝顔を楽しみ居候 本格の梅雨、くれぐれも御自重奉祈候 忽々 六月廿三日 順

葉書表 熱海市伊豆山押出徳富蘇峰先生

国府津町 川田順

北村 透谷 きたむら とうこ

明治元年～明治27年（1868～1894）神奈川県小田原市

詩人・評論家。本名・門太郎 東京専門学校（早稲田大学）に通うかたわら自由民権運動に参加するが離脱。その後、恋愛やキリスト教入信などをきっかけに文学活動を開始。詩集や評論を発表し、明治26年島崎藤村らとロマン主義文芸誌『文学界』を創刊。同時代の文学青年に大きな影響を与えたが、明治27年自ら命を絶った。

★小田原藩士北村快蔵とユキの長男として明治元年に誕生した。ちょうど門を新しくしたことに因み門太郎と名付けられた。明治26年には国府津前川村の長泉寺に移り、蘇峰と山路愛山に懇請された『エマルソン』の執筆に取りかかった。その際、蘇峰から執筆の資料として洋書「エメルソン伝」「エメルソン論」「アルノルトノエメルソン論」を

透谷に手渡したことが、蘇峰の手帳に記されている。別頁に消し込みがされており、透谷より返却されていることが判る。蘇峰は北村の人となりを「今も尚ほ透谷の玉の如き人格が、胸底に印している」と評している。

◆展示品

・蘇峰の手帳（備忘録） 透谷に貸した洋書の題目が書かれている。
・北村透谷著『十二文豪 エマルソン』 民友社出版

呉 清源 ご せいげん

大正3年～平成26年（1914～2014） 中国福建省

囲碁の棋士。日本棋院瀬越憲作名誉九段門下。本名は呉 泉、清源は通称名。一時日本棋院を離れて読売新聞嘱託となるが、後に復帰。日本棋院名誉客員棋士。木谷実とともに「新布石」の創始者としても知られる。門下に林海峰らがいる。

★小田原には昭和30年から住み始め、平成26年に亡くなった。亡くなる直前まで「新しい打ち方がいくらかでもできる」と囲碁に対する挑戦を続けていた。享年100。

◆展示書簡 （昭和30年4月6日付）

謹啓陽春之候となりましたが不順な昨今 先生には御機嫌如何お過しでいらっしやいませうか御伺ひ申上げます。昨夏は御拝眉の機を得 親しく御言葉頂き誠に感激の至で御座いました 又かねて宮田先生をおわすらはせして御染墨を請うて居りましたところ早速に御聞とどけ賜りましたこと身に余る光栄と幾重にも厚く御礼申上げます。先日上京の折宮田先生より頂戴致しました中和の語は年来深く心の鑑と致して居りましたところ先生よりお恵み頂きました御染墨と一致して居りましたのも偶然

とは思はれず感動させられました 永く家宝として秘蔵させて頂きますと共に 御高教の程肝に銘じて今後の処世の指針と致しますことを願って居ります 宮田先生へ迄よき折に参上御礼申上げ度く御願ひ申上げて居りますが不取敢略儀乍寸楮以て御礼申上げます 頓首

四月五日 呉清源百拝

徳富先生侍史

封筒表 熱海市徳富蘇峰先生 (赤鉛筆で「保」と書き込みあり)

封筒裏 神奈川県足柄下郡仙石原村 呉清源

阪谷 芳郎

文久3年〜昭和16年(1863〜1941) 岡山県

大蔵官僚、政治家、法学博士。

★小田原市江之浦に建つ「相翁松の碑」を建立した1人。石碑の文撰を阪谷が担当した。

「相翁松の碑」とは

明治時代、東京帝大の学生三人、阪谷芳郎(第11代大蔵大臣)、添田寿一(日本興業銀行初代総裁)、坪野平太郎(第2代神戸市長)が春休みを利用した熱海への旅行の途上、景色のすばらしい小田原市江之浦の松の木陰で休み、立身出世の暁にはこの地に碑を建てようと誓い合った。誓いに違わず名を成した三人は23年後の明治40年に江之浦を再訪し碑を建立した。この話は当時の小学校の教科書にも「松下の誓い」として掲載された。「相翁松の碑」は大正12年の関東大震災で埋没破損したが、修理して再建された。松も地震で倒れたため、二世を植栽したが現在が残っていない。

◆展示品 「相翁松の碑」拓本

回顧明治十七年余在東京帝国大学 適獲春季休暇 與学友添田寿一坪野

平太郎二子提携 弊袴草鞋 探湘南之勝 到絵浦 憩于所謂相翁松下
踞盤根 喫搏飯 飯冷水 遥望海上 時天氣晴朗 水波不起 萬頃一碧
近之無數布帆陰見乎煙波島影之間 使人想歌聖赤湾妙味 遠之房相諸山
或没全身乎杳靄陰々露翠髮 或巍々聳空 蘿影晴波 而東南則豆之大島
噴煙衝天 三人不覺呼快 余曰 吾徒僅賴父兄寒囊 以修學 今幸觀爽
快之景 以大養英氣 他日各學成身立 則建碑干茲 以記此快 二子曰
諾 其後三人俱卒業 二子或奉職官衙 或執業民間 功績偉大 猶房相
諸山陰々巍々而清秀溫雅與俗輩不同 猶布帆島影可愛而勢望之盛有島煙
衝天之勢 余亦聊樹立焉 於是三人胥謀 欲踏松下之約距顧松下之約距
今二十有三年 當時所觀特相模灣中之景而已 尚放眼其外 則大洋浩々
蕩々遠連歐米 因想歐米賢豪之所為 規模宏大聳動宇內 則吾從今日所
成就 不過相模小灣之觀望焉耳 前途猶遼遠二子其勉哉 余亦將附驥尾
試駕馬之行 抑余更有所大鑑於松焉 思其高拔群木具棟梁之材 因歷年
長久 則知盛德大器之成在保健康矣 思其清霜雪後衆凋 則覺宴安鴟毒
艱難良藥矣 觀其生遲々而晚翠鬱々 則躁進誤事而不績在老成也必矣
觀其亭々卓立不變清操 則立身全終在廉潔也明矣 嘻松也 吾徒之益友
歟 二子曰 俞君被松薰陶最多 宜作銘以欲頌其德 其言懇至誼不可辭
乃不顧不文繫銘曰

茲見 君子山水 之鄉 其德山高

其壽 水長 維壽 維德 永誓 不忘

明治四十年丁未三月

大蔵大臣正四位勲一等法学博士阪谷芳朗撰

日本興業銀行総裁從四位勲三等法学博士添田壽一書

前神戸市長法学士坪野平太郎題額

大正十二年九月一日地大イニ震フ相翁松八顛覆枯死シ碑ハ倒レテ土中ニ
埋没セリ是ニ於テ建碑者三人相謀りて原碑ヲ修理シ傍ニ稚松ヲ植工テ成
長繁茂ヲ祈リ以テ名木追懷ノ意ヲ表ス

大正十三年九月一日 芳郎追記 寿一書

◆展示書簡 (大正14年5月22日付)

拝啓 今日の日国民新聞紙上慈母孝子の一節小生当りざること遠く恐縮汗顔の至りに奉存候 但深厚なる御友情の発露御礼申上様無之候 頓首々々

五月廿二日

芳郎

徳富老台

尚過日は御書面奉謝候。

封筒表 東京市外大森山王 徳富猪一郎様

封筒裏 東京市小石川区原町百廿六番地、阪谷芳郎

添田 寿一

元治元年〜昭和4年(1864〜1929) 福岡県

官僚・実業家 明治17年大蔵省に入り、旧藩主黒田長成に随行し、その後自費でイギリス、ドイツに留学。大蔵省で主税官、大臣秘書官、監督局長、大蔵次官等を務め、金本位制の実施や台湾銀行の創立に尽力した。台湾銀行初代頭取となる。以降は、日本興業銀行と日仏銀行の創立に参画し、日本興業銀行初代総裁、中外商業新報社社長、鉄道院総裁、報知新聞社社長、台湾銀行監査役等に就任した。貴族院勅選議員。

★「相翁松の碑」を建立した3人のうちの1人。石碑の書を担当した。独特の筆跡で、幼少の頃より能書家として知られる。

◆展示書簡 (明治□年6月20日付)

拝啓 直に御貴論ニ接シ御厚情毎度ながら奉謝候 仰セノ如ク此度ハ一個ノ私益以外ニ少シク志ス所有之テ好マシカラサル役目ヲ承諾候 御上ハ必ズ学ヒタル所思性同信スル所ヲ以テ立チ行ハレサレバ去ルノ決心ニ有之候間御休神被下度 先ハ御親切ノ段深ク奉謝候也 六月廿日 添田寿徳富先生

二白 何卒向後も御差措キナク御気付ノ事ハ御忠告奉願候
封筒なし

◆展示写真 小田原御用邸の御殿・小田原駅停車場・鰯定置網・小田原電気鉄道・富士屋自動車運行地図(小田原市立図書館所蔵)

二宮

二宮町は、神奈川県南部に位置し、東を大磯町、西を小田原市と接しています。江戸時代には東海道大磯宿と小田原宿の間宿として栄え、また一時期は近海で鰯漁が盛んに行われました。東海道線二宮駅は、隣接する大磯駅や国府津駅に遅れること15年、二宮町出身の医師であり政治家でもあった伊達時(1849-1916)の尽力によって、明治35(1902)年に開設されました。伊達はその二宮駅に秦野盆地の物資(葉タバコ、落花生、生糸、秦野木綿など)を搬送させるべく、明治39(1906)年、湘南馬車鉄道(後の湘南軽便鉄道)を設立し初代社長となりました。また県立園芸試験場の誘致も行うなど、伊達は二宮の近代化に多くの貢献を果たしました。

その功績を顕彰するため、二宮駅開設50年を記念して昭和26(1951)年、二宮駅南口に石碑が建てられましたが、徳富蘇峰の筆によりその題字が書かれています。

東京からも比較的近い温暖な地の二宮には、戦時疎開や転地療養などで訪れる人も多く、また大磯や国府津、小田原とも隣接しており、保養地や別荘地としての賑わいを見せた時期がありました。犬養毅や松浦厚、日比翁助、吉田五十八など、各界の著名人士が住まいました。徳富蘇峰も、秘書・塩崎彦一が戦後二宮の別荘街の一角に居を構えたことで、しばしば熱海から足を運び、特に春の探梅や秋の柿の時期を好んで訪れました。

気候温暖でのどかな半農半漁の町・二宮について、歌人の窪田空穂はいみじくも「(二宮に)初めて来た時には、どうしてこんな所にかうした

静かな所があるのだろうと思った」と記し、一方、出版界で活躍した二宮町出身の松本昇平は「世を忍ぶ話題人にとつて格好の隠れ里としての風土性を多分に秘めた適地だったのかもしれない」と“地の人間”ならではの深い視点で表現しています。

犬養 毅

安政2年～昭和7年（1855～1932） 岡山県

政治家。号・木堂。東海経済新報記者を経て、立憲改進黨創立に参画。大同団結運動で活躍。第1次大隈内閣文相、第2次山本内閣逋相をつとめる。大正11年革新倶楽部を組織、加藤高明らと護憲三派内閣を結成、逋相に就任。昭和4年立憲政友会総裁。昭和6年首相となるが、翌年五一五事件で暗殺される。

★明治41年に避寒の為、二宮の原田に別荘を建築。明治43年には二宮の青年に向けた講演会において、「将来の青年」について3時間の熱弁をふるったとの記録が残っている。

◆展示色紙

学道愛人

（読み）道を学び人を愛す 春来つて有脚 情を平らかにし

春来有脚

物に応ず 雲出て無心

平情応物

（意味）人としての行いの道を学び、人を愛し、春が来て万物を発生させ育てるように徳を施し、平らかな心で物

雲出無心

事に対応する。雲が自然と湧き出すように無心であ

木堂老人

りたい。

松浦 厚

元治元年～昭和9年（1864～1934） 長崎県

華族。号・鸞洲。肥前平戸藩主松浦詮の長男。茶道家、漢詩人。明治17年英国留学、ケンブリッジ大学で国際公法を学ぶ。明治41年伯爵を継ぎ、貴族院議員に当選。旧藩内の殖産事業に尽力。昭和6年辞任し、素行会

長、弓馬会長、華族乗馬会幹事、学習院評議会員などを務めた。

★大正5年頃から、二宮の山西に別荘「梅沢荘梅華農屋」を建て住んだ。大正11年には敷地内に別邸「天空海閣楼」を新築。梅沢荘にはテニスコートもあり、皇族や各国の外交官、政財界人などが招かれて園遊会も催された。二宮町の文化事業にも多額の寄付をしている。

◆展示書簡（大正〇年8月17日付） 漢詩入り

拜啓 殘炎難過 候処 愈御清福 奉大賀候 御口正被下ハバ仰幸之節 特別議會に於て小生第二分科主査招考責任を呈し而て後研究全態面白からず間接に硬論を唱へ候も不得 遂二病となり京を去り沼津に参り二宮梅沢荘に静養快全致し候 秋風を迎え改悔の革新を祈居候 御高見御示し被下候ハバ幸甚候 頓首 八月十七日 松浦 徳富蘇峰先生

（添えられていた漢詩）

何関世俗喚疎狂 終日繙書不出房 避暑良図君識否 案詩修忽意中涼

洲初草艸

封筒表 神奈川県逗子別荘 徳富猪一郎殿

封筒裏 二宮梅沢荘 伯松浦厚

原 石 鼎

明治19年～昭和26年（1886～1951） 島根県

俳人。本名は鼎。高浜虚子に師事。俳誌「鹿火屋」（かびや）を創刊・主宰。大正期の「ホトトギス」を代表する作家の一人で、色彩感覚に優れたみずみずしい作風で一世を風靡した。画も能くした。

★昭和16年、二宮に家を新築し、病氣療養につとめた。体調を崩しながらも句作が続けたが、昭和26年絶句となった「松朽ち葉かからぬ五 百木無かりけり」を残して二宮の地で他界。

◆展示書簡 (昭和13年3月3日付)

謹啓 今般拙画展覽会に対し多大の御助力下され難有御礼申上候 初日は近藤氏の御光来を得御高評御掲載相成爲に続々売切済と相成 最早残りすくなくと相成申候 これ一に先生の御聲援によるものにして一同感激いたし居申候 先ハ取急ぎ御礼迄如斯に有之申候 恕々頓首
三月三日 原石鼎

蘇峰先生閣下

封筒表 京橋区日吉町国民新聞社 徳富先生 御膝下 速達

封筒裏 麻布区龍土町五四 原石鼎

伊達時

嘉永2年〜大正5年 (1849〜1916) 神奈川県二宮町

医師、教育者。湘南馬車鉄道初代社長。福沢諭吉の影響を受け、民権運動に参加。立憲政友会の神奈川支部を創設した。伊藤博文の知遇を受け国政に参加。

★明治20年に東海道本線の横浜―国府津間が開通したが、二宮には駅が設置されなかったことから、伊達は請願書を提出し交渉に当たった。苦心の末、明治35年二宮駅が設置された。その後、秦野の物資を二宮駅に運送するための湘南馬車鉄道を設立し初代社長となった。地域の医療事業の推進、女子教育の充実、盲学校、ろう学校の校長に就任するなど、郷土の発展にも大きな足跡を残した。昭和26年、二宮駅開業50年を記念して、二宮駅南口駅前に「伊達時彰徳碑」が建立された。碑の題字は蘇峰の筆による。

◆展示品 頌徳碑題字写真

真鶴

真鶴町は、相模湾に面した神奈川県南西部の真鶴半島を中心とした町で、俯瞰した様が、飛んでいる鶴の姿に見えることから名付けられたとも言われています。小田原市と湯河原町に挟まれ、真鶴半島先端の真鶴岬は、三ツ石とともに展望の開けた景勝地として知られています。またその半島内には江戸時代、小田原藩によって植林された15万本の松苗が、今も御林（明治維新後に皇室御料林となったため）や魚付き保安林と呼ばれ大切に守られています。また古くより上質の石材・小松石の産地としても有名で、北方の採石場では現在も採掘作業が続けられ、町の主要な産業となっています。真鶴町出身の石材商・土屋大次郎（1857-1910）は、横浜港の整備や横須賀軍港の築港に際し、多量の小松石を安価に提供して貢献。土屋石店と真鶴の名を一躍世に広めました。町の交通網は、豆相人車鉄道（後の熱海軽便鉄道）真鶴駅が明治29（1896）年、省線熱海線の真鶴駅が関東大震災前年の大正11（1922）年に開業しました。

昭和3（1928）年1月、蘇峰は真鶴に、友人・三宅克己（洋画家）の新居を訪ねました。懸崖に建てられた画室兼住居からの眺望は無類で、その美しさを「豆相の山海は、全く双眸の中に鍾まる」と表現しました。三宅画伯に真鶴を愛する理由を尋ね、「それは地中海沿岸ニース辺の光景に尤も酷肖するが為め」との返答を受け、蘇峰は「三浦半島から伊豆半島の沿岸は、如何にも日本の名勝地だ」との思いを深めました。昭和6（1931）年、この真鶴の三宅邸で行われた歌会に参加した与謝野晶子は、当地の美しさを「わが立てる真鶴崎が二つにす 相模の海と伊豆のしら波」という歌に詠みました。この句碑は今も真鶴岬に建ち、相模湾の風光に華を添えています。

与謝野 晶子

明治11年〜昭和17年 (1878〜1942) 大阪府

歌人。旧姓・鳳。堺高女卒。明星派の代表的歌人。処女歌集「みだれ髪」

によって大胆に女性の官能と情熱をつたい、明治30年代の浪漫主義運動の中心となった。明治34年鉄幹と結婚。「源氏物語」の口語訳でも知られる。

★与謝野晶子は昭和6年12月初めて真鶴を訪れ、画家三宅克己の案内で半島を巡った。その夜三宅邸で歌会を開き「わが立てる真鶴崎が二つにす 相模の海と伊豆の白波」をはじめ、数首の歌を詠んだ。

◆展示書簡 (大正12年12月17日付)

啓上 意外のお贈物を頂き驚きのなかに御深切を忝く存じます
お目に懸りまして御礼を申し上げますがとりあへずお使に待つて頂いて御礼を申述べます 「明星」ハ震災で休刊してをりますが 明春四月から今一度出す相談をしてをります 春になりましたら必ず御伺ひ致します 逗子の方に入らつしやいますか 何れ新聞社の方々に伺つてから参ります 御健か七日

徳富先生 御もとに

晶子

封筒表 徳富先生おもとに 晶子 (手製の赤染封筒)

◆展示品 与謝野晶子碑 拓本

「わが立てる真鶴崎が二つにす 相模の海と伊豆の白波」

三宅 克己

みやけ かつき

明治7年〜昭和29年 (1888〜1973) 徳島県

洋画家。曾山幸彦、原田直次郎に学ぶ。明治24年に来日したイギリス人水彩画家ジョン・ヴァーレー・ジュニアの作品に接し、水彩画を志す。明治30年渡米し、イエール大学付属美術学校で学ぶ。明治31年イギリスに渡り、明治32年帰国。同年白馬会会員となる。中沢弘光らと光風会を設立。日本芸術院恩賜賞受賞。

★大正15年真鶴に移住。真鶴は「日本国内にあつては、やはり稀に

見る勝絶の地、南フランスに比すべき美しき風景」と絶賛した。真鶴に建てた洋館に与謝野晶子他多くの文人を招き、また多くの作品により、中央の文壇・画壇にこの地を紹介。真鶴の風景を愛し続けた画家のひとり。

◆展示書簡 (昭和19年1月12日付)

新年に際し先生奥様御揃にて御目出度御越年謹賀 私も御蔭様にて兎も角も雑煮餅だけは祝得之事感謝に不堪 決戦の年はこれ決勝の新年とか世人は祝ひ居れど実は決戦はこれからにて明年は果して何の年か未恐ろしき次第 新年早々一度御年賀参邸致し度処年末より汽車切符発売大制限にて午後は全部売切の札掲げられ駅前には殆未明より乗客群をなし乗車券容易に手に入らざる有様 出入全く不自由宛ら孤島の流人の生活同様にて言語道断とは正に昨今の状況 唯感謝に不堪るは郵便物の制限無き事これさへ早晩如何になり行く可きや 安心油断無用右の次第にて甚乍略儀書中年頭の御挨拶迄 頓首 昭和十九年一月十二日 三宅克己 徳富蘇峰先生

封筒表 熱海市伊豆山字押出 晩晴草堂徳富蘇峰先生侍史

土屋 計左右

つちや けいさう

慶応3年〜昭和19年 (1888〜1973) 愛媛県

実業家。石材商で衆議院議員の土屋大次郎の三男。三井銀行上海支店長、第一ホテル社長、新京第一ホテル社長。谷崎潤一郎と交友があった。

★土屋家は真鶴の石業界の代表的存在で、特に土屋計左右の父・大次郎は横浜船渠や横須賀軍港などで重要な仕事を担当し、真鶴石の名を世に広めた。土屋家に今も掛かる蘇峰の書が、親交の深さを物語っている。土屋家旧宅は現在、真鶴町民俗資料館になっている。

◆展示書簡 (昭和31年9月)

来る11月1日開店のお知らせ

拝啓 愈々御清祥の段お慶び申上げます 扱て終戦以来十一年間米軍高級将校宿舎として接收せられておりました幣ホテルは八月末日解除となりました 只今全館に亘り大改装を致して居り内外の面目を一新して来る十一月一日より皆様の快適なるビジネスホテルとして華々しく再開致します 何卒倍旧の御引立を賜ります様御願ひ申上げます 敬具

昭和三十一年九月

東京都港区芝新橋駅際 株式会社第一ホテル 取締役社長 土屋計左右
葉書表 熱海市伊豆山押出一一九 徳富蘇峯様

湯河原

湯河原町は、相模湾に面した神奈川県南西部に位置し、静岡県の熱海市と千歳川を境に接しています。湯河原温泉は、古よりその泉質や湯量によって多くの湯治客を集め、また明治期からは著名な作家や画家などが逗留、幾多の作品を残したことも知られています。明治29（1896）年に豆相人車鉄道が、そして大正13（1924）年には省線熱海線が開業し、東京からの浴客で賑わいました。また昭和11（1936）年に起きた二・二六事件では、伊藤屋旅館別荘・光風荘に滞在中の牧野伸顕元内大臣が襲撃され、東京以外で唯一、湯河原町がその現場となりました。

徳富蘇峰にとっても湯河原は特別の場所でした。大正8（1919）年、悪性盲腸を患い二度に及び手術の後、湯河原温泉で静養した際の様子を次のように記しています。「湯河原は予に取りては思出多き所だ。予の太患を医したるは林病院長であるが、予後の始末は、湯河原がつけて呉れた。『大戦後の世界と日本』などの著作も此地の産物だ。されば何かにつけて、湯河原を想起する」と。そして数年振りに訪れた湯河原の繁盛振りを「天野屋に立ち寄れば、客室と云い、浴室と云い、新築やら、改造

やらで、面目を一新。大広間なども出来て、長岡外史翁が大筆を揮っている」「従来雑木林であった辺が、殆んど旅館や売店となっている。今更らその変化に驚かざるを得ない」と、少々困惑気味に伝えています。東京からの交通網の延伸によって旅館など施設が充実を図り、より多くの貴紳や文士、画人が湯河原に集いました。夏目漱石、国木田独步、島崎藤村。そして竹内栖鳳や安井曾太郎など、蘇峰は広く親交を深めました。

安井 曾太郎

明治21年〜昭和30年（1888〜1955） 京都府

洋画家。浅井忠に学ぶ。津田青楓の留学に同行し渡仏、ジャン・ポール・ローランスに師事した。のち石井柏亭・有島生馬らと一水会を結成する。帝室技芸員・芸術院会員。東京芸大教授。文化勲章受章。

★昭和24年初夏、神奈川県湯河原天野屋別荘（旧竹内栖鳳画室）に居を移し創作活動を行う。

◆展示書簡（昭和25年2月9日付）

拝啓 愈々御清安大賀候 先日はお邪魔仕り色々おもてなしに預り大変喜び申候 以てお蔭御灸其の後調子頗るよろしく大喜びに候 御厚意難有御礼申上候 早速御礼旁々御報告申し上げるべき処 甚だおくれ誠に失礼仕り候 何卒不悪御寛容願上候 不順の折柄御自愛の程祈上候 先は乍遅延以書中厚く御礼申上候 敬具

二月八日

安井曾太郎

徳富猪一郎様 愚妻よりもよろしく申し居り候

封筒表 熱海市伊豆山押出 徳富猪一郎様

封筒裏 神奈川県湯河原町天野屋別荘 安井曾太郎

たけうち せいほう

竹内 栖鳳

元治元年～昭和17年（1864～1942） 京都

日本画家。近代日本画の先駆者で、画歴は半世紀に及び、戦前の京都画壇を代表する大家である。「西の栖鳳、東の大観」と称された。帝室技芸員。第1回文化勲章受章者。本名・恒吉。霞中庵の号もある。

★湯河原・天野屋旅館の敷地内に画室「也万茂々庵（やまももあん）」（山桃庵）を設けた。昭和6年から没するまで晩年のほとんどをこの地で送り、大作「東本願寺大寝殿障壁画」もここで制作した。

◆展示書簡（明治44年10月13日付）

謹啓愈々御清祥奉賀此事二奉候 陳者御尊父様九十歳御誕辰御祝として結構なる御品御惠贈二預り難有拝受致候 永々記念仕る可候 茲二略儀ながら以紙上御礼申述度如此御座候 敬具

十月十三日

竹内栖鳳

徳富猪一郎殿

封筒表 東京市京橋区日吉町二十番地国民新聞社 徳富猪一郎殿

封筒裏 京都御池通油小路西 竹内栖鳳

牧野 伸顕

文久元年～昭和24年（1861～1949） 鹿児島県

政治家、外交官。大久保利通の子。明治13年外務省に入り伊藤博文の知遇を得た。第1次西園寺公望内閣の文相となり、義務教育の4年から6年への延長などに尽力。のち枢密顧問官、農商務相、外相、パリ講和会議全権、宮内相、内大臣を歴任。

★牧野は昭和11年に起きた二・二六事件で、湯河原の伊藤屋旅館別館「光風荘」に宿泊していたところを襲撃されるが、孫である麻生和子（吉 田茂の娘・麻生太郎の母）や旅館の従業員の機転によって窮地を脱した。護衛の警官は殺害され、光風荘は焼失した。

◆展示書簡（大正14年4月17日付）

拝啓仕候 愈々暖氣相加はり候処益々御清適之段大慶奉存候 扱て此程は御多忙に抱はらず重而御祝辞を辱致御厚情一層難有感銘致候 過日は阿部兄と沼津迄同車致御近況を承はり 此節は別して御元氣にて御精勵之由為邦家欣賀之至奉存候 茲に乍遅延御礼旁々御健康と御多祥を奉祈候 勿々拝具

十七日

牧野伸顕

蘇峰先生

封筒表、東京市外大森山玉、徳富猪一郎殿。

封筒裏、静岡県沼津御用邸

◆展示品 蘇峰が静養先の湯河原で焼いた鉢盆

熱海

熱海市は、伊豆半島東側の付け根（静岡県最東部）に位置し、神奈川県の湯河原町と接しています。古来より湯治場として栄え、その地の利を蘇峰は「熱海は東京から伊豆に入る関門であり、上方から伊豆を抜ける出口である」と表現しています。徳富蘇峰と熱海の出会いは明治11（1878）年頃、同志社在学中に読んだ朝野新聞紙上にて「しばしば成島柳北の熱海に関する文に接した」ことによるものでした。その後「明治十四、五年頃には日本に於ける上流社会の一大交際場であった熱海も、「予が明治二十六年、病を熱海に養うたる時代はむしろ衰亡とも云う可き時代であった」と回想、短い繁栄を嘆きました。

そんな熱海も、人車鉄道やその後の鉄道省熱海線の開通（大正14（1925）年）によって、観光地としての人氣や規模が飛躍的に拡大しました。蘇峰は当時の戸惑う街の様子を「熱海も東京から三時間以内にて行けるこ

となった。汽車開通して客に推寄せられ、幾百年来、お客商売の熱海町民諸君も、一時は面喰らった次第である」と新聞コラムに書いています。

温暖な熱海を愛した蘇峰は昭和の初頭より、毎年1～3月を熱海で過ごししました。熱海ホテルや古屋旅館に逗留し、執筆活動に専念しました。

熱海の眺望を気に入った蘇峰は、その感慨を次のように記しました。「伊豆の海に初島あるは、相模の海に江の島あるが如し。唯だ此の一点景の為に、伊豆の海にあたかも画龍点睛の看を做さしむ」と。

熱海には蘇峰の知己先輩も多く、曾我祐準や清浦奎吾、坪内逍遙、佐木信綱など滞在中折を見ては訪ねました。昭和17(1942)年に清浦伯が亡くなると、蘇峰はその「米寿庵」を譲り受け、「晚晴草堂」と号して東京・大森から転居、亡くなる昭和32(1957)年までの14年間を過ごしました。熱海に移った後も筆勢は衰えず、昭和27(1952)年には蘇峰のライフワークでもあった『近世日本国民史』100巻を脱稿完成させました。晚晴草堂の書斎からはもちろんのこと、相模灘とそこに浮かぶ初島の姿を一望にでき、蘇峰は飽くことなくその風景を楽しんだと言われている。

曾我祐準

天保14年～昭和10年(1844～1935) 福岡県

陸軍軍人、政治家。明治14年に谷干城らと開拓使官有物払下げ中止・憲法制定を上奏。明治21年明宮(のちの大正天皇)の御教育主任となる。宮中顧問官・日本鉄道会社社長・枢密顧問官を歴任。貴族院議員を勤め、土曜会の中心人物として活躍した。

★曾我は明治8年から熱海に通いリュウマチを治療していた。明治29年には熱海市小嵐町に別荘「小嵐亭」を竣工。蘇峰は自らを「曾我の門下生」と慕い、熱海滞在中にはしばしば小嵐亭を訪ねた。

◆展示書簡(昭和7年3月24日付)

敬呈 恙なく古稀の寿を重ねられ倍々御勇健に被為涉候段 誠に慶賀の至りに不堪 謹んで御祝詞申上候 扱て別封甚だ粗末の品ながら当邸建築の当時老生が植付致候桜樹を以て製作せしめたるもの 聊か御祝の寸志までに呈上仕り度候間何卒御笑納被成下度 右乍略儀以書中御祝詞まで 如斯に御座候 拝具

昭和七年三月廿四日

曾我祐準

徳富猪一郎様

封筒表 東京市外入新井町新井宿二八三一 徳富猪一郎様

封筒裏 静岡県熱海町別邸 曾我祐準

うちだ のぶや

内田 信也

明治13年～昭和46年(1880～1971) 茨城県

実業家、政治家。山下亀三郎、勝田銀次郎と並び三大船成金の一人。船舶事業で財を成した後、政界にも進出し宮城県知事、鉄道大臣、農商務大臣、農林大臣等を歴任した。

★大正8年に実母の静養のため熱海に別荘を建設。伝統的な和風建築のたたずまいで座敷の周りを畳廊下に取り囲む入側造になっている。

内田の後、根津嘉一郎、桜井兵五郎の所有となった。起雲閣の名は桜井兵五郎が昭和22年に旅館として開業した頃に命名された。熱海市指定有形文化財。旅館起雲閣は山本有三、志賀直哉、谷崎潤一郎、太宰治など文豪たちにも愛された。

◆展示書簡(印刷) (昭和19年3月18日付)

肅啓 今回図らずも農商大臣を拝命致候に際し早速御懇篤なる御祝詞を賜はり御激励被下候御芳情洵に難有御厚礼申上候時局愈々重大の折柄此上共に御指導御援助願上候 先は不取敢以書中御挨拶申上候 敬具

昭和十九年三月

内田信也

徳富猪一郎様

封筒表 熱海市伊豆山 徳富猪一郎様

封筒裏 東京都麻布区三河台町二十八番地 内田信也

つばうち しゅうよう

坪内逍遙

安政6年〜昭和10年（1859〜1935） 岐阜県

小説家、評論家、翻訳家、劇作家。東京大学卒業後、東京専門学校（早稲田大学）の講師、のち教授となる。『小説真髓』『当世書生気質』を著し文壇の中心的存在となった。のち演劇改良運動を弟子島村抱月らとともにはじめ俳優養成にも尽力。昭和3年にはシェークスピア全集の訳業を完成させた。

★坪内は、大正9年から昭和10年に亡くなるまでの15年間を熱海で過ごした。庭にある樹齢30余年と言われる2本の柿の大樹から会津八一により「双柿舎」と名付けられた。門の扁額も会津八一の筆による。町立熱海図書館の設置にも尽力した。蘇峰は「逍遙翁のような文豪を町民に数ふる熱海は此上なき幸せだ」と記している。

◆展示書簡

（□年10月13日付）

肅啓 やうやく好秋晴と相成候 御清穆之由奉恭賀候 扱過日本間氏を以て御繁用中一つ無心申入候処 御快諾下され早速にも御揮毫の惠賜を辱うし欣悦無此上候 過般拝受之高著と共に永く雅宝として熱海の茅舎に愛蔵可仕候 先は不取敢御礼申入度、如此候 草々頓首

十月十三日

辻叟逍遙

蘇峰先生座下

二仲最近拙訳二部、別封にて謹呈致候 御閑暇に御一瞥被下候はゞ、本懐之至に御座候

便箋、ペン書。封筒なし。

おざき こうよう

尾崎紅葉

慶応3年〜明治36年（1868〜1903） 東京

作家、俳人。帝国大学中退。明治18年山田美妙らと硯友社を結成し、機関誌『我楽多文庫』を発行。明治22年読売新聞社に入社。以後同紙に『伽羅枕』『多情多恨』などの作品を発表する。30年に開始された『金色夜叉』の連載は人気を博したが、病没で未完に終った。泉鏡花など多数の門弟の育成・指導にもつとめた

★『金色夜叉』は明治30年から35年まで読売新聞に連載された。爆発的な人気を呼び、熱海の名は全国的に知れ渡った。国道135号線沿いには「お宮の松」と「貫一お宮の像」が立っている。

◆展示書簡

（明治□年1月1日付）

新年の御慶目出度申納候 なお筆硯の愈御多祥ならん事を祈り候 一日 葉書表 東京赤坂氷川町五番地 徳富猪一郎様 尾崎紅葉

佐佐木信綱

明治5年〜昭和38年（1872〜1963） 三重県

歌人、国文学者。高崎正風に和歌を学ぶ。明治21年帝国大学卒業後、短歌革新運動に参加。31年から竹柏会を主宰し「心の花」を機関誌とする。木下利玄、川田順、九条武子、柳原白蓮、相馬御風など多くの歌人を育成した。万葉集や歌学を研究、東京帝大で教鞭を執る。昭和12年第1回文化勲章受賞。文学博士。学士院・芸術院会員。

★昭和19年72歳の時に病後の静養の地として熱海に居を構えた。庭に一樹の老梅があり、王安石の“寒さを凌ぎ独り自ら開く梅の花”の漢詩から蘇峰が「凌寒荘」（りょうかんそう）と名付けた。亡くなるまでの19年間熱海で過ごした。

◆展示書簡

（明治26年1月9日付）

新年ノ慶賀めでたく申納候 旧冬八度々御繁用中を御妨致候段奉拜謝候
早速賀詞を呈すべく存候へど旅行中延引御免じ成下度候 先ハおくれば
せながら御慶まで 早々頓首

一月九日夕 信綱

徳富様机下

なによりも嬉しきものは事なくてとりをむかふるころなりけり

たゆみなくすすみもてゆく月日かなわかなすわさかからまし可は

元旦の述懐 御笑覧奉願候

封筒表 赤坂区氷川町五番地 徳富猪一郎様 親展

封筒裏 一月九日夕 神田区小川町 佐々木信綱

お か た も ち

岡田茂吉

明治15年〜昭和30年（1882〜1955） 東京都

宗教家。世界救世教の初代教祖。箱根美術館、救世熱海美術館（現・MOA美術館）などを創設した。自然農法の創始者としても知られる。

★岡田茂吉は昭和19年に箱根から熱海に居を移し「東山荘」に住み始めた。「東山荘」は元第一銀行三代頭取石井健吾や山下汽船社長の山下亀三郎の所有であった別荘で本館のほか、離れ、別館、茶室、蔵などからなる。国の登録文化財。

◆展示書簡 （昭和27年7月1日付）

謹啓 新緑の候御清栄の段お喜び申し上げます。陳者此の度、箱根美術館は東洋全般に亘る名品を集め、その芸術を一般社会に公開し、我国文化の向上に資すると共に、広く海外に紹介する目的を以て、箱根強羅に開館することとなりました。其の意図する処世界文化に貢献せんとするもので、一般公開を前に此処に特別鑑賞会を開催し御招待申し上げたいと存じます。万障御繰合せ被下、御出席の栄を賜り度く御案内申し上げます。敬具

一、日時 昭和廿七年七月一日正午（強羅ホテルにお集り下され度、粗餐の用意有之）

一、場所 箱根強羅（強羅公園上）箱根美術館

追而 準備の都合も有之御出席の有無本月二十三日迄に御返事賜り度お願い申し上げます。又小田原駅と美術館の間のバス連絡も有之、御利用の方は小田原駅表口より午前十一時から十二時頃迄に御乗車下され度。

昭和廿七年六月十五日 箱根美術館長 岡田茂吉

御来館の折は本状御持参下され度

封筒表 熱海市伊豆山押出 徳富蘇峰殿

封筒裏 箱根強羅箱根美術館 館長 岡田茂吉

美術館までの地図付き

や ま 本

山本五十六

明治17年〜昭和18年（1884〜1943）新潟県

海軍軍人。第26、27代連合艦隊司令長官。駐米大使館付武官、空母「赤城」艦長などを歴任。昭和4年第一次ロンドン軍縮会議に随員として参加。その後、第一航空戦隊司令官、海軍航空本部長として海軍航空部門の強化に尽力した。太平洋戦争では、真珠湾攻撃をはじめ作戦全般を指揮。昭和18年4月、南方戦線を視察中、米軍機に要撃され戦死、元帥を追贈された。

★山本五十六は熱海を愛し、海軍寮として使用されていた建物（今も現存）にしばしば滞在した。

◆展示書簡 （昭和14年11月11日付）

拝啓 此度御令孫兵学校入学予定世二芽出度御選入相成候御儀 誠二不堪慶賀謹テ御悦申上候 御高示の御儀乍不及拝供何連其内親しく御本人二モ御目二かかり御注意等も申上度存居候 小生の愚考としてハ此際過度の緊張急速の準備等ハ一切無用ニテ平易の御心構ニテ撰生ニ御注意相成

候次第二御座候 右不取敢一筆御返事申上度 向寒御自愛專一奉祈上候
敬具

十一月十一日

山本五十六

徳富先生 玉案下

封筒表 東京市大森山王二丁目 徳富猪一郎先生

封筒裏 青山南町 六ノ八一 山本五十六

なかぞね やすひろ

中曽根 康弘

大正7年～ (1918～) 群馬県

東大卒後内務省入省。昭和22年の総選挙以後連続当選。防衛庁長官・自
民党総務会長・通産省・党幹事長等要職を歴任する。自由民主党総裁第
11代、内閣総理大臣(第71・72・73代)。

★来宮神社にある徳富蘇峰の頌徳碑は熱海で95歳の天寿を全うした
蘇峰の遺髪を納め、昭和60年に「蘇峰会」により建立された。碑に刻
まれた「餘香」とは、菅公の一節からとったもので、書は中曽根氏に
よるもの。中曽根氏は昭和22年頃から尊敬する蘇峰をしばしば熱海に
訪ね、「日本に対する遺言」を熱心に聞き取った。そんな中曽根氏に蘇
峰は「志在天下」という書を贈り、この言葉通り首相になった感謝の
意を込め、中曽根氏は先の石碑の筆を執ったという。

◆展示書簡 (昭和28年6月2日付)

拝啓 先生の御健康と御大著の御完成を奉祝いたします 六月五日の歴史
的御講演を待っています 稚き芽も四度の霜に耐へにけり 敬白

六月二日

中曽根康弘

徳富先生

封筒表 静岡県熱海伊豆山 徳富先生

封筒裏 千代田区富士見町議員宿舍 中曽根康弘

内田 勇次

明治28年～昭和□年 (1895～19□□) 静岡県熱海市

実業家。熱海古屋旅館当主。父は熱海町長内田市郎左衛門。

★内田が当主を務める古屋旅館は東郷平八郎や徳富蘇峰が熱海の定宿と
していた。昭和15年には蘇峰の為に「楽閑荘」を新築。一日中陽が部屋
いっぱいに入り、眼前に広がる海は初島や大島まで見渡すことができた。
楽閑荘は蘇峰の命名による。

◆展示書簡 昭和15年11月5日付(印刷葉書)

熱海温泉 自肅自戒の熱海は何処よりもよい皆様の保養の地で御座いま
す。弊館は新体制下、国策に順応して営業いたし居りますから、何卒御
心安く御来館の程願ひ上げます。

新築落成「楽閑荘」

浴場不老泉新設 (茶代癸辞) 清快楼 古屋旅館

葉書表 東京市大森山王二丁目二八三一 徳富猪一郎様

小杉 あさ

明治14年～昭和44年 (1881～1969) 静岡県

盲教育・障害児教育の功労者。19歳の時に完全失明し、東海訓盲院を経
て東京盲啞学校教員練習科に学び、盲生教育の道に進む。静岡県盲人連
合会の結成や、盲人会館の建設に奔走する。「日本のヘレン・ケラー」と
呼ばれ、静岡盲学校の基礎を築いた。

★蘇峰は昭和22年9月から晩年まで小杉の治療を受けた。蘇峰臨終の
際にも小杉は立ち会ったそうである。清浦奎吾、西園寺公望、平泉澄
などの著名人も蘇峰と同様に小杉の鍼灸・マッサージを受けていた。

◆展示書簡 (昭和24年11月12日付)(点字書簡)

トクトミ センセイ コジシ 十一ガツ十二ニチ コスギアサハイ

ハイケイタダイマ トートイ オンボクセキ シンシユアイオース
マコトニアリガタク ゴトーサマヨリ ハイジュツカマツリマシテ カギ
リナク カンシヤカンゲキニムセビイヨイヨ ヨノタメケンキュニ
ドリヨクスベク ハップンイタシマシタ マタマイド カブンキンニセン
エンナリノ ゴインモツニ アツカリマシテ ナントモキョーシユクノホ
カゴザイマセン ホカーニヤマザキサマヨリ キン百円ナリモマサニチ
ヨーダイイタシマシタ カサネガサネタダオソレイルバカリデゴザ
イマス サクヤハゴ施灸ノトコロ オデンワ モーシアゲ マコトシツレ
イデゴザイマシタ フデスエナガラ センジツモアイカワラスゴコーグ
ーニアズカリ マコトニアリガタク ゴコーレイ モーシアゲマス マズワ
トリアエズミギ ゴアイサツモーシアゲマス カシコ

封筒表 熱海市伊豆山徳富猪一郎殿

封筒裏 静岡市音羽町九二 小杉あさ

はたけやま つるきち

畠山 鶴吉

実業家。衆議院議員。

★熱海つるや旅館の創業者。大月ホテルの山田弥一とは、旅館業・選
挙の両面でライバル関係にあった。

◆展示書簡

・昭和30年1月1日付 年賀状

謹賀新年 観光の春を迎へて貴家の萬福を御祈り申し上げます

パリー風呂 つるや 館主 畠山鶴吉

・昭和31年2月29日(消印)

(前略)観光事業の振興につきましては本年八月我が政府も初めて観光問題
を取り上げるに至り閣議に於て、観光五ヶ年計画を来年度より実施すると事
に決定致しました。我が伊豆地区は私の念願通り此の計画に基き最重要地域

の一つに指定されその開発と整備は画期的な発展を迎へんとして居り、此の
事は私の最も欣快とする所であります。国立公園の整備につきましても(中
略)富士伊豆地区は最優先的に扱はれる計画となつて居り、更に道路の改善
につきましても新計画により国道・有料道共に逐次解決されつつある事と合
はせまして寔に御同慶にたへません。尚我々の長年の悲願であり現下最大の
関心事たる伊豆半島への鉄道敷設問題につきましては国鉄・私鉄何れにせよ
一日も速やかなる認可獲得を念願として最善の努力を傾けて参りましたが、
遅くも来春には解決される見透しを得ました。

衆議院議員 運輸委員長 観光特別委員

やまだ やしち

山田 弥一

明治39年〜昭和53年(1906〜1978) 静岡県熱海市

政治家。衆議院議員、第一次池田内閣の運輸政務次官、全国旅館生活衛
生同業組合連合会会長。早稲田大学専門部商科卒業。

★熱海・大月ホテルの創業者。つるやホテルの畠山鶴吉とは、旅館業・
選挙の両面でライバル関係にあった。

◆展示書簡

・昭和30年元旦 年賀状

賀正 元旦 エデン風呂 大月館 山田弥一

葉書表 市内伊豆山足川 徳富猪一郎殿

・昭和28年盛夏(印刷)

暑中お見舞い申し上げます。今回皆様の格別な御支援に依り再度国会に議席
を得、建設委員及び議会運営委員を務め国事に奔走しております。第十六特
別国会開会中に付きお伺い出来ませんので茲に紙面を借り御挨拶申し上げま
す。昭和二十八年盛夏

衆議院議員 山田弥一

葉書宛先 市内伊豆山足川 徳富猪一郎殿

熱海ホテル

大正11年帝國ホテルの副支配人も勤めた岸衛により開業された。しかし創業の翌年、関東大震災の被害で営業停止。昭和5年新たにスペイン風のホテルに改装された。戦後は国際興業が経営したが、昭和52年に解体。現在は更地となっている。熱海サンビーチに立つお宮の松は、熱海ホテルから移植された二代目の松という。

★蘇峰は大正初年より、熱海滞在の際の定宿としている。

◆展示品 ホテルパンフレット

あたま

熱海城

幸楽園の三浦美淑が自己所有地の錦ヶ浦頂上に造営した娯楽施設。昭和35年に完成した。所有権が変わった現在も、熱海のシンボルの娯楽施設として人気を集めている。

◆展示品

「熱海城」築城チラシ

◆展示品

- ・熱海海岸採取石 昭和16年
- ・印鑑と印譜 「伊豆山人」「晚晴草堂」
- ・熱海市役所題字（写真）昭和28年（熱海市役所所蔵）
- ・熱海伊豆山温泉と附近鳥瞰図（熱海図書館所蔵）

伊東

伊東市は、相模湾に面した伊豆半島の東岸中部に位置し、静岡県最東部の市でもあります。「温泉のまち」として有名で、江戸時代には三代將軍徳川家光公への献上湯も行われ、その湧出量は今も本州一を誇っています。蘇峰はその様子を「伊東全市は、温泉の上に立っている町、いわば関東の別府であろう」と称えています。また慶長10（1605）年には、家康の命によって、ウィリアム・アダムス（三浦安針）が唐人川河口で造船を行い、西洋式大型帆船2隻が造られています。

首都圏からのアクセスは、大正時代中期に自動車道やバス路線が整備されるまでは、東京や熱海からの汽船による海路に頼っていました。

昭和13（1938）年には熱海から延伸された省線伊東線が開通し、別荘地としての開発が進みました。さらには昭和36（1961）年、伊豆急行により、念願だった伊東下田間が開通し、伊東以南の開発に拍車がかかりました。富士箱根伊豆国立公園に指定された絶壁の海岸線はすばらしく、伊東が生んだ文士・木下杢太郎はその風景を「伊太利亜海岸の景色を思い出す」と表現し、蘇峰は熱海・伊東間を自動車で「何の用事も無きに、只だその風光を愛する為に往復した」と語っています。伊豆半島を「日本の大公園」と賛美し、その東岸を「長汀曲浦の眺め、とても筆には尽し難い」と蘇峰が感嘆したように、のびやかな眺望と山海の恵みに惹かれ、多くの要人や文人墨客らが伊東に住まい訪れました。

東郷 平八郎

弘化4年〜昭和9年（1847〜1934） 鹿児島県

軍人。海軍大将・元帥。戊辰戦争では新潟・函館に転戦。明治4年英国留学。日清戦争では「浪速」艦長として豊島沖、黄海、威海衛などに出撃。日露戦争では連合艦隊司令長官となり、日本海海戦でバルチック艦隊を全滅させた。のち、軍令部長・東宮御学問所総裁を歴任。

★東郷平八郎は夫人のリウウマチ療養のため、昭和4年伊東に別荘を建て、昭和8年まで利用していた。現在は伊東東郷記念館として保存されている。東郷平八郎と蘇峰は共に熱海の定宿が同じ「古屋旅館」で、逗留中に親交を結んだ。

◆展示書軸

勁節難移万鉄石 堅操不攻耐氷霜 東郷平八郎(花押)

(読み) 勁節移し難し方に鉄石 堅操攻めず氷霜に耐ふ

(意味) 強くて堅い節操は変え難くまさに鉄石のごとく、堅い操(志)は人を攻めとがめず厳しさにじっと耐える。

振衣千仞岡濯足萬里流 平八郎書(花押)

(読み) 衣を千仞の岡に振るい 足を万里の流れに濯わん

(意味) 世俗の名声や利益は捨て隠遁生活を送りたい。

木下 李太郎

き 下 の り だ ろ う

明治18年～昭和20年(1885～1945) 静岡県伊東市

本名・太田正雄 皮膚科の医学者、詩人、劇作家、翻訳家、美術史家。東京帝大医学部教授。与謝野寛・晶子が主宰する新詩社に参加。耽美派の詩人として北原白秋と並び称される。医学者としては顔にあざができる病気を発見し、「太田母斑」と呼ばれている。また一時は画家を志したこともあり、三宅克己に師事した。

★木下の生家は素封家の商家で、天保6年に建てられた木造平家建である。建物の中央に囲炉裏を切った8畳があり、土間には伊豆石の力マドが据えられている。伊東市内において現存する最古の民家として市指定文化財されている。

◆展示書簡(大正15年3月3日付)

謹啓 今日国民新聞に於て拙著二対する御批評接誦寵褒の実二過ぎ候ことと喜悦且恐縮仕候 尤も小生ノ今後相努むべき標的を御明示被下候 この二三省可仕候 小生去月日初以来盲腸炎に罹りいまだに褥中二在り先生往年の御清恙今更想起御同情申上候次第に御座候 草々頓首
三月三
太田正雄

徳富先生座前

追伸「いすばにあ・ぼるつがる記」いろいろの事情にて出版相遅れ候が年内二八上梓 御覽二得度存居候

封筒表 東京市京橋区日吉町国民新聞社 徳富蘇峰先生

封筒裏 名古屋市東区武平町二丁目十六 太田正

野間 清治

の ま せ い じ

明治11年～昭和13年(1878～1938) 群馬県

実業家。講談社創業者、報知新聞社社長。「雑誌王」とよばれ、昭和時代前期の出版界を牽引した。全人教育として剣道の普及に努め、「剣道社長」と呼ばれた。

★実験学校として静岡県伊東市に、野間自由幼稚園を設立。野間別荘は、北里柴三郎が別荘として建てた和風の建物(大正2年建と、その後昭和11年に野間が建てた洋館とから成った)。

◆展示書簡(昭和5年6月26日付)

拝啓 時下益々御清光の段奉賀候 陳者小生今般前社長大隈侯爵を始め重なる関係者諸氏の切望に依り報知新聞社々長に就任致候に付ては今後全身全力を傾注して社運の発展の為め邦家の為め同胞の為め出来得る限りの奮闘の覚悟に御座候間何卒一層の御指導御鞭撻に預り度切望仕候早速拝趨御挨拶可申上の處勿々の際不取敢書中を以て如斯御座候 敬具
昭和五年六月二十六日 報知新聞社社長 野間清治

封筒表 京橋区銀座西ノ四 民友社 徳富猪一郎殿

◆展示品 講談社の雑誌「キング」(昭和17年12月号)

北里 柴三郎

嘉永5年〜昭和6年(1852〜1931) 熊本県

細菌学者。ドイツに留学。コッホのもとで研究し、破傷風菌の純粋培養に成功、さらに抗毒素を発見。帰国後ベスト菌を発見し、血清療法を研究。伝染病研究所長を務めたが、その東大移管に反対し、私財を投じて北里研究所を創立した。慶大医学部初代学部長、日本医師会初代会長、貴族院勅撰議員、学士院会員。

★北里は大正2年、静岡県伊東市松川の河畔に自ら設計した別荘を完成させた。宮大工出身の地元の棟梁が造った雄大な純和風建築で、毎夏この別荘を訪れたという。日本初の室内温泉プールは一般の人にも開放され、特に子供を歓迎したことから「北里さんの千人風呂」と親しまれ伊東の名所になった。通学橋を架けたり、道路の整備、鉄道の誘致など伊東の発展に尽力した。

◆展示書簡 (明治□年□月22日付)

先時御約束申上候原稿御回致候義少々都合有之二付明日午前迄二御回致可申上候ハバ 明後日ノ紙上二御記載被下度候 右安迄 匆々 廿二日

徳富様

封筒表 日吉町民友社 徳富猪一郎様 親展急

封筒裏 北里柴三郎

馬越 恭平

天保15年〜昭和8年(1844〜1933) 岡山県

実業家。益田孝の知遇を得て三井物産に勤務し、大日本麦酒(日本麦酒、朝日麦酒、札幌麦酒の合併会社)の社長を務め、「日本のビール王」とよばれた。衆議院議員、貴族院勅選議員。茶人・馬越化生としても知られた。

★馬越旧邸は現在「暖香園」の別館「きた岡」として使用されている。

◆展示書簡 □年11月28日付

肅啓 秋冷ノ節益御清適奉□寿候 陳ハ先月上旬各社用向ニテ朝鮮地方出張数年ノ大患後久方振長旅行無異帰京仕候 随テ該地産ノ粗品献呈ス御笑味賜候ハバ幸甚ノ至ニ奉存候 以参御覧可申上筈ニ御座候得とも乍略儀書面ニテ平素ノ御無音御詫迄ニ不取敢右ノ段謝尊意致如此御座候 敬具

十一月廿八日

馬越恭平

徳富猪一郎様 侍史 頓首

封筒表 徳富猪一郎閣下

封筒裏 東京市麻布区北日ヶ窪町四十六番地

下田

下田市は伊豆半島南部に位置し、江戸時代より風待ち湊として栄え、下田節では「伊豆の下田に長居はおよし 縞の財布が空になる」と唄われました。東海道の三島宿より、伊豆半島中央部を南北に縦走する下田街道の終点でもあります。

嘉永7(1854)年、日米和親条約が締結され、箱館とともに開港。吉田松陰によるペリー旗艦ボアタン号搭乗・海外密航の失敗、米国総領事タウンゼント・ハリスと唐人お吉(斎藤さち)の物語など、幕末から近代にかけて、下田は日本の開国史における重要な舞台となってきまし

た。

『吉田松陰』の著書もある徳富蘇峰は、そんな下田を「下田は鳥羽と共に、日本船の時代には欠く可らざる要港であった。江戸と大阪を航行するには、下田に入らざれば鳥羽に入り、鳥羽に入らざれば下田に入る。下田は遠州洋七十五里、相模灘四十五里の中間に在る要港だ」と俯瞰しています。また大正時代、蘇峰が初めて下田を訪れた時の印象を「市街は何となく古色があった。長崎程の色彩はなきも、決して殺風景ではなかった。而して其の港湾の風景、実に愛す可きものがあつた」と記しています。下田の象徴「下田船渠」も、柿崎弁天と共に港湾の一風景として目に入ったことでしょう。「我等は名残惜しくも下田を立つた。下田は実に思出多き地である。縁があらば重ねて遊びたい」。歴史家としての蘇峰が下田を去るにあたり吐露した感慨に、この地が持つ魅力が端的に表現されているようにも思えます。

下田自動車社長の鈴木吉兵衛や東海自動車社長の中村長五郎、伊豆巡環鉄道敷設に奔走した小泉三申や戯曲「唐人お吉」を作した真山青果など、蘇峰は下田にゆかりの名士とも交遊を深めました。

澤村 久右衛門

明治31年～昭和39年（1898～1964）

下田町長、県会議員、下田船渠（ドック）社長、下田信用金庫理事長、波勝崎苑を開園。

★下田を代表する企業「下田船渠」の社長を務めた澤村の邸宅は大正4年に建築された。なまこ壁と伊豆石の、下田における特徴的建築様式を持ち、昭和60年には「下田市歴史的建造物」の指定を受けている。

◆展示書簡

（昭和13年4月24日付 記念絵葉書）

春陽いと麗かに恙がなく日米修交の式典を執り行はれましたことを謹みて厚く御礼申上ます 下田町長 澤村久右衛門

開港八十五周年黒船祭記念のスタンプあり

葉書表 東京市大森区山王町一ノ六三 徳富猪一郎殿

◆展示美術品

亜墨利加船渡来図（上下巻）（37×137cm）

ペリーが下田に来航した際、同行した絵師が描いた絵巻

参考文献

・『コンサイス日本人名事典第4版』（株）三省堂・『徳富蘇峰記念館所蔵 民友社関係資料集 別巻』（株）三一書房・『徳富蘇峰関係文書』酒田正敏・坂野潤治他編 山川出版社・「小田原の原風景・交通編」杉山博久著・伊勢治書店・「一枚の古い写真」小笠原清著 小田原市立図書館・地域資料室通信第12号 小田原市図書館・「二宮ゆかりの人物ガイドブック」二宮図書館・「愛盲小杉あさと静岡県の盲教育」足立洋一郎 静新新書・（株）富士屋ホテルチェーン、ウィキペディア

御世話になった方々

小田原市立図書館の白政晶子氏、鳥居紗也子氏、星野和子氏、お城南通り商店会の金子不二夫氏、熱海市立図書館の川向氏、真鶴町産業観光課の青木理佳氏、町立湯河原美術館の池谷若菜氏、二宮町教育委員会の中山史奈子氏、山本陽一氏、小宮一夫氏、茅ヶ崎塵外館の皆様、お世話になりました。

平成27年1月6日発行

一部 二百円（税込）

編集 塩崎 信彦 宮崎 松代

発行者 発行所（公財）徳富蘇峰記念塩崎財団 代表理事 高野 信篤

〒251-0123 神奈川県中郡二宮町二宮605

TEL 0463-71-0266 FAX 0463-71-0677

ホームページ <http://www.soho-tokutorii.or.jp/>

《 相模湾西部地域における交通の発展と事象 》					
	年	西暦	月	事	柄
江戸	-	-	-	馬や駕籠が主要な交通手段	
	4年	1871	-	小田原に人力車が登場	
明治	5年	1872	10月	「新橋～横浜間」で、東海道経由の支線が日本最初の鉄道として開業	
	6～14年	1873	-	福沢諭吉や福住正兄などの尽力で「小田原～湯本～塔ノ沢間」に人力車道が開削される	
	9年	1876	4月	小田原(足柄県)は、廃藩置県後の第2次府県統合により神奈川県に編入され、県庁所在地の地位を失う	
	11年	1878	-	山口仙之助により、箱根宮ノ下に「富士屋ホテル」が創業	
	12～3年	1879	-	「神奈川～小田原間」で乗合馬車運行(途中4ヶ所で馬継ぎ)	
	19年	1886	7月	政府は「東京大阪間鉄道」の予定経路を、中仙道から東海道経由に変更 宮内庁により、芦ノ湖・塔ヶ島に皇族の避暑と外国からの賓客のための「箱根離宮」(現県立恩賜箱根公園)を造営	
	20年	1887	7月	官鉄(国鉄)の幹線「横浜～国府津間」が開通(大磯駅や国府津駅などが開業) 山口仙之助が私財を投じ「塔ノ沢・宮ノ下間道路」が開通(約7km)	
	21年	1888	10月	小田原馬車鉄道が開業(国府津～小田原～湯本、全長12.6km)湯本、塔ノ沢が東京からの日帰り圏内となる 「熱海御用邸」を造営	
	22年	1889	7月	官鉄(国鉄)の幹線「新橋～神戸間」が開通(600.2km 所要20時間強)、国府津～沼津間は山北・御殿場経由(現御殿場線)	
	23年	1890	-	伊藤博文の「滄浪閣」が竣工(小田原・本町)	
明治	24年	1891	-	富士屋ホテルの「新館」(今も現役)が竣工 正式な路線名称として「東海道線」が設定される	
	28年	1895	-	「宮ノ下御用邸」を造営(昭和8年に高松宮別邸、昭和21年に払い下げられ富士屋ホテル別館「菊華荘」に)	
	29年	1896	3月	豆相(ずそう)人車鉄道が開業(早川口の小田原停車場～熱海間、全長25.6kmを2～3人の車夫にて所要4時間)	
			10月	小田原馬車鉄道が小田原電気鉄道に改称	
	33年	1900	3月	小田原電気鉄道が全線を電化(京都、名古屋、川崎大師に次ぐ国内4番目の電気鉄道) 国府津～湯本間所要1時間	
	34年	1901	-	「小田原御用邸」を造営	
	35年	1902	4月	二宮駅開業	
			9月	【小田原大海嘯発生】	
	37年	1904	-	旅館松坂屋により「芦ノ湯～箱根町道路」が開通	
	39年	1906	6月	豆相人車鉄道、社名を熱海鉄道に変更 8月 湘南馬車鉄道が開業(二宮～秦野間10km)後に湘南軽便鉄道、湘南軌道と名称変更し、昭和12年まで存続 益田孝が「掃雲台」の設営を始める(小田原・板橋)、大正3年から亡くなるまでの24年間を居住した	
大正	40年	1907	9月	山県有朋が「古稀庵」を設営(小田原・板橋)	
			12月	熱海鉄道が軽便鉄道の営業を開始、蒸気機関車化により小田原～熱海間が2時間30分に 相陽汽船を合併した東京湾汽船(現・東海汽船)の大型船(200トン)就航、国府津～小田原～真鶴～熱海～網代～伊東	
	3年	1914	12月	東京駅開業	
	5年	1916	12月	東海道線の熱海線敷設工事開始(国府津～早川間8.9km第一期工事)	
	6年	1917	-	伊東自動車(後の東海自動車)が伊豆にて乗合自動車(バス事業)運行開始	
	7年	1918	4月	「丹那トンネル」掘削工事始まる	
	8年	1919	6月	小田原電気鉄道「箱根湯本～強羅間」開通(8.9km)、世界屈指の登山電車敷設を井上馨や益田孝らが強く推進 富士屋自動車が「国府津～宮ノ下～箱根町間」に乗合自動車の運行開始(所要2時間20分)	
	9年	1920	10月	省線熱海線の「国府津～小田原間」営業開始(小田原駅の開業は国府津に遅れること33年)	
			12月	熱海線国府津～小田原間開業により、小田電「国府津～小田原(幸町)間」を廃止し「幸町～小田原駅間」を開設 東京湾汽船の運航廃止	
	12年	1923	9月	【関東大震災発生】	
昭和	13年	1924	3月	熱海軽便鉄道、全線を廃止	
	14年	1925	3月	熱海駅開業、鉄道省熱海線工事完成(国府津～熱海間26.9km)	
			10月	大雄山鉄道(現伊豆箱根鉄道大雄山線)開通、仮小田原～大雄山間(9km)大雄山最乗寺への参詣鉄道として敷設	
	2年	1927	4月	小田原急行鉄道(現小田急電鉄)新宿～小田原間82km営業開始、所要2時間23分(特急ロマンスカーは昭和26年登場)	
	3年	1928	8月	日本電力㈱に合併された小田原電気鉄道は、箱根登山鉄道として分離独立、10月には登山線を小田原まで乗り入れ 熱海線の東京～熱海間(104.6km)電化完了	
	5年	1930	11月	【北伊豆地震発生】	
	8年	1933	-	伊豆循環道路東海岸線の完成	
	9年	1934	12月	「丹那トンネル」16年の歳月の後に完成、「熱海～沼津間」(21.6km)が電化複線で開業、熱海線が東海道本線に	
	13年	1938	12月	省線伊東線の「熱海～伊東間」(16.9km)が全線電化で開業	
	20年	1945	8月	【小田原空襲】	
昭和	31年	1956	5月	小田原電気鉄道を引き継ぎ「小田原駅～箱根板橋」を結んだ市内電車が交通量の増加を理由に廃止される	
	36年	1961	12月	伊豆急行により伊東～下田間(45.7km)が開通	
	39年	1964	10月	東海道新幹線開業(東京～新大阪間)	
			-	「須崎御用邸」を造営	
	46年	1971	4月	西湘バイパス、大磯～小田原間全線開業	

* 参考資料:「小田原の原風景・交通編」杉山博久著・伊勢治書店/一枚の古い写真」小笠原清著・小田原市立図書館/地域資料室通信第12号・小田原市図書館/富士屋ホテルチェーン(web)



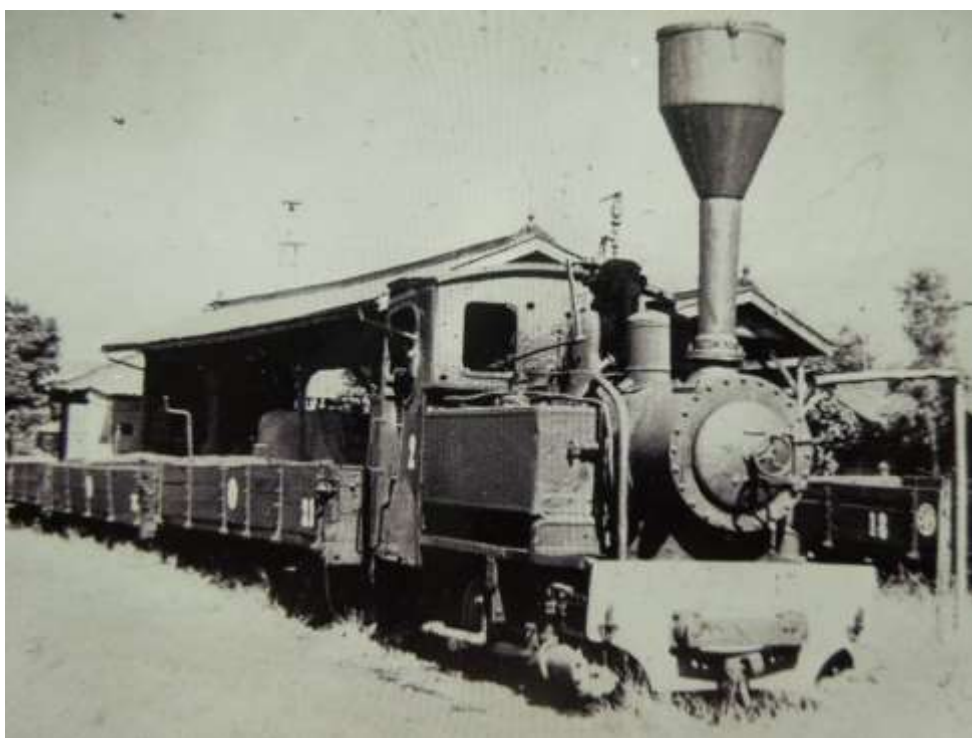
伊藤博文の小田原の別荘「滄浪閣」と御幸の浜
絵葉書(明治 34・5 年頃) (小田原市立図書館所蔵)



明治 43 年 6 月 5 日 東宮殿下(のちの大正天皇)行啓の際
古稀庵で撮られた記念写真(「公爵山県有朋伝」より)



酒匂の松並木の下を走る小田原電気鉄道(小田電)
(明治末頃) (小田原市立図書館所蔵)



二宮～秦野間を走った「湘南軽便鉄道」
(写真提供・二宮町教育委員会)